自分の肖像

大岡昇平

新潮社

雲の肖像

昭和五十四年三月十五日　印刷
昭和五十四年三月二十日　発行

著者　大岡昇平
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七十一
電話　業務(03)二六六—五一一一
　　編集(03)二六六—五四一一
振替　東京　四—八〇八

定価一一〇〇円

印刷　株式会社金羊社・製本　新宿加藤製本株式会社
©Shohei Ooka 1979, Printed in Japan
乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

長編小説

雲の肖像

目次

花蔭……7
妻の座標……21
父の心理……28
夜の化粧……36
若い果実……43
春日……51
日本平……59
恋の手ほどき……69
風かおる……75
迷路……80
人間関係……93
めぐりあい……104
翼雲……115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

火の鳥……132
影の世界……153
風紋……161
手紙……174
夏雲……179
新しき時……194
双曲線……203
転換……218
美しき争い……226
鰯雲……230
明日の花束……240
雲の肖像……247
あとがき……262

装画　藤松　博

雲の肖像

花　蔭

牧野恭助は、まあ幸福な晩年を送っているということが出来る。

人生の半ばをとっくにすぎた四十五歳という齢で、東京の家を戦災で失い、続いて妻の清子に先立たれる不幸が重なった時、十三歳の立子を抱えて、これから先どうやって行ったらいいのか、途方に暮れたものだった。

疎開のため大磯に買っておいた小さな家が、当時恭助の唯一の財産だった。清子や彼自身の身に着けていた物を、次々と売っていた。当時の言葉でいえば「買出生活」を送っている四十男のところへ後妻の来手はなかった。片親で立子を藤沢の女子学園へ通わせるのは、なみ大抵の苦労ではなかった。

しかしその立子もどうやら一人前の娘に育ち、五年前、身分相応のサラリーマンの、田辺新太郎のところへ片づいた頃から、恭助にも運が向いて来たのである。

世の中も治まり、東京の青山の焼跡の土地に値が出て来た。大正の船景気時代、相当名の聞えた船長だった父が残した広い土地を分割して、売ったり貸したりした金が、大磯の生活をうるおわしはじめた。船長の息子である彼には、なんとなく親しみがあったので、船会社や造船所の株を買ってみたら、みんな値が上った。

することなすこと、とんとん拍子に当るのが、ここ四、五年来の恭助で、しかも今や五十六歳の恭助には、実に二十歳年下の新しい妻がいる。

百合子は初婚ではなかった。結婚すると同時に出征して戦死してしまった海軍士官の未亡人で、戦後、幼稚園の保母をしながら、独身を守っていた気丈な女性である。器量も十人なみ以上で、まったく恭助にはもったいないくらいの後添いであった。

しかも娘夫婦に先立って、子供まで出来てしまった。「春彦」という名をつけて、恭助は文字通り目の中へ入れても痛くないほどの可愛がりようである。

年をとってから出来た子供は誰でも可愛いものだが、男の子は恭助にははじめてである。やはり自分の血を後のちまで伝えて行くには、男の子でなければ駄目だ、などと、やっと立つようになったばかりの春彦が示す「男らしい」仕草の一つ一つを、涎を垂らさんばかりの顔付で眺めている。

そういう恭助自身の生涯は、親の残した財産を守っただ

けだった。自分の力で獲得したもの、作り出したものはなにもなかった、ということは、とかく忘れ勝ちになる。

戦争中から遠ざかっていたゴルフをはじめた。婿の田辺新太郎は、社用ゴルフをはじめたばかりだった。彼の出身地は岐阜県で、両親の家は名古屋にあったが、勤め先の安藤電機が大阪にある関係で、四、五年来、芦屋に住んでいる。たまに立子といっしょに上京すると、きまって相模ゴルフ・クラブへ連れて行って、戦前のゴルファーのマナーを講釈するのは、楽しみの一つである。

二、三日中に行きます、と立子から手紙が来ていた。

「新太郎も来るんだろうな、一丁ひねってやるか」

と恭助は待ちかまえている。

今年は暮から五十日近く、雨が降らない、これも神武以来ということになりそうである。例年にないあたたかさで、芦屋の立子の家の庭では菜種が咲いた、と手紙にあった。

大磯の恭助の家でも梅の蕾がすっかりふくらんで、いつもより十日は早く満開になりそうである。

ところでそういう平和な恭助の生活にも、二、三日前から、ちょっとした異変が起っていた。

異変とは少し大げさであるが、まあこんなことも異変のうちに入れねばならぬくらい、若い妻と一歳の子供と三人暮しの恭助の毎日は平和だったのだ。

つまり恭助はいまちょっと下痢をしているのである。五十日続きの晴天の間にも、気圧の谷のいたずらで、雨が一時間ゴルフ場を濡らしたことがあった。その時偶然彼はコースに出ていて、クラブハウスから、ひどく離れたホールの真中で雨に会った。

ゴルフコースとは昨年来の神武景気で懐のあたたまった閑人たちが、自由に球を打つために、芝生を無暗と広く取ったところだから、雨宿りする樹蔭はない。風も強い。

連日の晴天にすっかり安心して、雨具の用意もなく出掛けたところへ、一天にわかにかき曇り、まるで夏の夕立みたいに、ざーっと降って来たのだから、たまらない。パンツまでしたたか濡れてしまった。

クラブハウスに辿りついてから、すぐ風呂へ入るべきだったのかもしれないが、シャツの着替がなかったので、車をいいつけて、相模野の真中にあるそのゴルフ場から、大磯まで一時間、濡れた服のまま、乗り続けたのが、いけなかったらしい。

少し寒気がしたので、大急ぎ売薬の風邪薬を飲んで、その夜は早目に寝てしまったのだが、夜中から腹がしくしく痛み出した。さっそく春彦に添寝をしている百合子を起しにかかった。

「おい、百合子、百合子」

と声をかけたが、一向に起きそうもない。一体に百合子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はよく寝るたちで、齢のせいでそろそろ目ざとくなって、夜中にふと目を覚ますと、二、三時間眠れないことのある恭助にとって、これが妻に対する唯一の不満といってもいいのだ。

「百合子、百合子」

といくら呼んでも、返事がない。春の夜寒の室内で手を伸ばして、揺り起すのも億劫なので、

「おい」

とわれ鐘のような声を出したら、やっと、

「ううん」

と色気のない声が返って来たが、それでもまだ眠が醒めないらしい。きょとんとした眼を天井へ向けて、

「えっ、泥棒でも入ったんですか」

と言ったのが、そもそも恭助に気に入らなかった。

「何を寝ぼけてるんだ。腹が痛くなったんだ。懐中カイロを入れて来てくれ」

「雨が降るのに、ゴルフなんかするからよ」

「何をっ」

とどなろうとした途端、春彦が眼をさまし、火がついたように泣き出した。

それだけ懐中カイロを持って来るのに手間取ったわけで、こんどはどうも最初から調子が狂っていた、と恭助はあとで思った。

夜が明けるのを待って、呼びにやったかかりつけの医師は、あいにく昨日から東京にいる馴染みの患者が急変して、立合いに行ったまま帰っていなかった。

止むを得ず、春彦のお子さん用の常備薬を三度分飲んだら、痛みだけはやっととまったが、下痢はとまらない。

齢のせいで、恭助はだいぶ食べものにうるさくなっている。病気のために口の味がわるくなっているくせに、百合子の作ったオムレツ、オカユ、オートミルと、みんな「オ」のついた病人料理を、

「こんなものが食えるか」

と突き返す。一日奥の八畳で寝たっきりだった。こんな時は愛する百合子とも口を利かなくなるのが、恭助の性分である。

子供に眼がないとわかっているから、春彦を「お馬」に入れて、枕元へ連れて行っても、にやっと口だけ笑って見せるだけで、いつものようにあやそうとはしない。

ほとほと手を焼いた三日がすぎて、やっと少しかたいオカユを食べられるようになった晩、鎌倉のゴルフ友達の杉野明平から電話がかかって来た。電話口へは百合子が出て、

「主人はお腹をこわして、まだ寝ておりますの。またお誘い下さいまし」

と折角断ったのに、いつのまにか起き上って、後へ来ていた恭助である。黙って受話器をひったくり、

「おお、いい天気だな。……うん、ひどい目に会った。……いや、もうたいしたことない……ほほお、田宮のヘボが出て来るっていうのか。そんなにひねられたいのかな……こっちは病み上りで、丁度いいかげんの手合せになるだろう……明日十一時スタート？　ああ、いいとも」

と百合子が後から袖を引く手を払いのけ、払いのけ、約束してしまったので、百合子はかんかんに怒ってしまった。

百合子は恭助のゴルフに不賛成ではない。健康にはいいにきまっていることである。なんといっても二〇も年が違う夫だ。結婚してから三、四年の間に、どんどん年寄り臭く、口やかましくなって行く。一日中、外で遊んで来てくれれば、こんなうれしいことはない。川奈や箱根へ泊りがけで行ってくれるのも大いに歓迎である。

「旦那様には内緒よ」

とお手伝いのお時さんに春彦をあずけて、東京へ出る。日比谷で映画を見たり、銀座の千疋屋でフルーツを食べたり、のうのうと躰中の筋肉をほぐして帰って来る。

従って世間によくいう「ゴルフ後家」の嘆きは、百合子の気持とはまったく縁がなかったのだが、三日間さんざん手を焼かしたあと、まだ寝床もたたんでいないのに、ゴルフに出かける約束をしてしまったので、かっとなってしまったのである。

恭助もさすがに、少し工合が悪いと見えて、百合子の顔をなるべく見ないようにしながら、電話口を離れ、部屋に帰りかける。百合子の声が廊下を追って来る。

「あなた、明日、ほんとに、ゴルフにいらっしゃるつもり」

「うん、うん、――だいぶ工合いいようだからな」

恭助はふり返らない。

「だいぶいいって、まだ、オカユ召し上ってるくせに」

「下痢はもうとまったよ」

部屋へ入ると、いきなり寝床へもぐり込んでしまう。

「うそ、おっしゃい」

百合子の声は殺気をおびて来る気配だったが、「うそ」と言われて、恭助もむっとした。

「うそ、たあ、なんだい。きみの見張りはまさか便所まではとどくまい」

「見張り、なんて、いやなことおっしゃるわね。いつあたしがあなたを見張りました」

売り言葉に買い言葉。彼女はいつのまにか、枕元に膝をそろえて、坐っている。

「現にいまの電話を立ち聞きしたじゃないか」

「まあ、あきれた。杉野さんの電話なんか、誰が立ち聞きするもんですか。あたしが取次いだんじゃありませんか。自然に耳に入って来たんだわ」

「それが立ち聞きだ。おれが出た以上、君はさっさと、どっかへ消えちまうべきだった」

「風邪引くといけないと思って、カーディガンを取って来てあげたんですよ」
百合子は憮然とした面持で、恭助が畳の上へ脱ぎすてた、黄色のカーディガンを眺める。
「ああ、そうか」
杉野とのゴルフの約束に気を取られて気がつかなかったが、そういえば、うしろから何かふわりと着せられて、袖を通した記憶があった。
「しかしとにかく、下痢はなおった。約束しちゃったから仕方がない。明日は行きます」
と亭主の威厳を示した。
「いまから杉野さんへ電話して、ことわればいいわ」
「ゴルフは紳士の遊戯ですよ。一旦約束したことを取り消すことは出来ません」
「でも、そんな躰で」
と百合子は半白の髪をぼうぼうに延ばした恭助の顔を、見やりながら、
「無理ですわ。明日は崩れるかもしれないって、天気予報でいってました。下痢がぶり返したら、どうなさるんです」
「天気は大丈夫だ。夕方、箱根山が見えたからな。あれが見える以上、大丈夫だ。天気予報よりたしかなんだ」
「あら、いつの間にごらんになったんです。箱根が見えたなんて」
恭助の家で、箱根が見えるのは、便所の窓だけである。
「便所へ行った時だ」
「いつの間にいらしたんです」
「うるさい」
恭助はとうとう癇癪玉を破裂さしてしまった。
「春彦じゃあるまいし、便所ぐらい一人で行けらあ」
「下痢してらっしゃるんでしょう」
「うーむ」
とうなって、恭助は百合子を睨みつけた。途端に腹がゴロッと鳴った。会話がとぎれた時だったので、その音は意外に大きく、部屋中にとどろき渡った。
「それ、ごらんなさい。やっぱりまだ直ってないじゃありませんか」
と百合子はどうしても、夫をまだ病人にしてしまわないと気がすまないらしい。
「ばかいえ。腹が鳴るのは、直りかけの証拠だ。丁度雷が鳴って、梅雨が明けるようなものだ」
「梅雨と下痢になんの関係があるんです。勝手な理屈ばかりつけて」
「わたしはこれでも二〇年、きみより人生の経験を積んでいます。わたしのいうことに間違いはない」
百合子は真面目な顔にかえって、しばらく恭助の顔を見詰めていたが、やがておもむろに言った。

「あなたはご自分の躰を大事にする気がないんですか」
「とんでもない。これでもまだこの世に未練はあります。だからゴルフに精出してるんですよ」
「精を出しすぎて、下痢しちゃ、なんにもならないじゃありませんか」
「下痢は直ったって言ったら、直ったんだ」
「あなたはあたしや春彦のために、たとえ一年二年でも長生きして下さる気はないんですか」
五十六になって一歳の子供を持った恭助はいっときもそのことが頭を離れたことはない。春彦が一人前になるのが二十五として、あと二四年、八十歳までは生きててやらねばならぬ。出来ればうんと金を貯めて、世の中へ出てから、はずかしい思いをしないですむようにしておいてやらねばならない、と電車の中なぞで、学校出たてのサラリーマンといったかっこうの若者を見るごとに、思わないことはないのだが、百合子にあらたまってそれを言われると、かちんと来た。
そもそも寿命というものは、自分から言う分にはさしつかえないが、ひとに言われるのは、なんとなくいやな気がするものである。愛する妻でもそれはかわりはない。
春彦が生れて以来、恭助がいつまで生きていてくれるかと、百合子がいつも考えているのを、恭助は知っている。医療の進歩で人間の寿命はだいぶ延びたらしいが、一方ガンや心臓病なんて厄介な病気も、アメリカなみに増えているようである。
知合いの誰それがガンになった、心筋梗塞でぽっくり行ったなどという報せを聞く度に、百合子が見せる顔付は、ただごとではない。ただそれだけのために、自分を大事にしてくれるのかと邪推されないこともないので、恭助はちょっと面白くないところである。
「ああ、きみや春彦がいなくったって、わたしゃ九十、百までも生きるつもりですよ」と恭助は皮肉にいった。「それがどうかしたんですか」
「そんならゴルフへ行かないで下さい」
「かりにわたしが直ってないとしても、下痢腹でゴルフをやったからって、死んだって人のことは聞いたことがない。大丈夫ですよ」
「じゃどうしても、おやめにならないって、おっしゃるんですね」
「さようです」
「そんなら、あたし、お暇をいただきます」と百合子は言った。
二人の四年の夫婦生活の間に、これははじめて言われる言葉だった。恭助はさすがにどきっとしたが、それは少しも表面に出さず、
「お暇とはたいそう古風においでになりましたね」

「古風だから、あなたみたいな、自分勝手な人に、今まで我慢していたんです」
「すみませんでした。そんなに我慢して下すってたとは、ちっとも存じませんで、失礼いたしました。しかしわたしの方でも、あなたや春彦に搾取されるために、長生きするのはごめんです。辞職さして貰います」
「辞職だなんて、ずいぶん他人行儀なことを、おっしゃるわね」
「あなたは暇を取る、わたしは辞職する。他人行儀もへったくれもない、れっきとした他人ですよ。行儀作法を問題にするこたあないでしょう」
「わかりました。今夜はもうおそうございますから、もう一晩とめていただきますけれど、あしたはきっとお暇をいただきますから」
「どうぞ、ご自由に」
ぷんとした顔付で百合子は部屋を出て行った。
台所の方でがたがた音がし、お手伝いのお時さんに、なにか言いつける声が聞える。廊下に足音が近づいて来て、となりの六畳の障子がそっと開く。
そこにはさっきから、春彦を寝かしてあるのだ。恭助の寝ている八畳とはふすまでへだてた次の間である。いつもは八畳へ親子三人、川の字になって寝るのだが、恭助が下痢を起してからは、百合子と春彦は、そっちへ移っている。
五十六歳の恭助は、百合子と床を並べて寝るのが、どうかすると重荷に感じられることがある。だからたまには八畳一杯に、楽々と手足を延ばして眠るのも、いい気持なのだが……
喧嘩した後では、そのふすまが、まるでブロック塀であるかのような重みを持って、立ちはだかっているように感じられる。しかし一方それが不意にがらっと開いて、伊達巻姿のあでやかな百合子が、
「あなたっ」
と思いつめた顔で、突貫して来るのではないか、と恭助はそんな風にうぬぼれるたちである。
そうなれば、もともと犬も食わない夫婦喧嘩のことである。仲直りになるのはいいとして、どうもその段取りが下痢腹の恭助には重荷なのである。
幸か不幸か、あいのふすまは、しずまり返っている。足音も立てずに、百合子は動いている。箪笥の抽出をあける音がする。かさこそと何やら持ち出す気配。やっとそれがすんだと思ったら、また別の抽出をあける音。ボストン・バッグのチャックをあける音。
(はてな、ほんとに、出て行く気かな)
そんなはずはないのである。この程度の喧嘩なら、気分転換の意味をかねて、ふた月に一度ぐらいの割合で、やっている。結局恭助は自分を押通して、すんで来ているのだ

が……

今日の喧嘩に、ほんとに、いつもと違ったとこがあったかな、と自分の言ったこと、百合子の言葉、表情など、いろいろ思いうかべてみる——そんなはずはない。

「お暇」という言葉が出たのが、ちょっと気になるが、五十六歳の恭助は女の心持は知ってるつもりである。「お暇」と言ってしまった手前、なにかしなければならない。仕度することで、自分の気持をなだめているんだろう。

ひと夜明ければ気が変るさ、出て行けやしないさ、馬鹿な奴め、とにやにや笑ってるうちに、恭助は眠ってしまった。

鎌倉のゴルフ友達、杉野明平との、約束の時間は午前十一時である。十一時に小田急線中央林間のゴルフ場へ着くためには、九時三十分の上りの湘南電車に乗らねばならぬ。八時半、恭助は眼をさました。

「おい」

と呼んだが、返事がない。

「おーい、起きるぞぉ」

とこれだけいえば、いつもならすぐあいのふすまが開いて、

「そんな大きな声を出さなくても、聞えるわよ」

と百合子の笑顔が、あらわれるところだが、今朝はふすまは、しーんと静まり返っている。

(そうだっけ、昨夜喧嘩したんだっけ)

とやっと思い出し、

(畜生、ふて寝してやがるのか)

憤然として起き上り、ふすまをがらりと開けたが、誰もいない。春彦の寝床もきれいに上げてある。

(や、春彦を連れてったな)

と恭助ははじめてあわて出した。

「おーい、お時さん」

とお手伝いの名を呼びながら、寝巻のまま、廊下を早足に歩いて行った。

「はーい」

と台所から出て来たお時さんと、危く鉢合せをするとこだった。

「おい、春彦はどうした、春彦は」とせき込んできく。

「お坊ちゃまは、おやすみでございます」

「うそつけ、部屋にいないじゃないか」

「こちらへお寝かししてございます」

成程、台所に続いたお時さんの部屋の障子が開いていて、春彦のやすらかな寝顔が見える。

「そうか」

と恭助は安堵の胸を撫で下した。百合子が連れ出したのではなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com